

## 参加記

# アーカイブズ記述の国際標準化への歩みと現在地

## The Progress and Present Position of International Standardization of Archival Descriptions

千代田 裕子

Yuko Chiyoda

### 1 はじめに

2022年11月19日および同26日に、学習院大学短期客員研究員であるエイドリアン・カニンガム先生の公開講演会が同校で開催された。本稿は、11月19日開催（学習院大学アーカイブズ学専攻主催）の「ICAアーカイブズ記述のためのRiC（レコード・イン・コンテキスト）概念モデル及びISO 23081記録管理のメタデータ標準：レコードキーピングの新しい世界」の参加記である。

エイドリアン・カニンガム先生はオーストラリア出身で、ニューサウスウェールズ州立図書館の司書からキャリアをスタートし、オーストラリア国立図書館、オーストラリア国立公文書館で勤務されたのち、国際アーカイブズ会議（International Council on Archives、以下、「ICA」という）において、ISAD (G) 2nd、ISAAR (CPF) 2nd及びISDF等のアーカイブズ記述の国際標準の策定に携わった。

本講演では、まずアーカイブズ記述の歴史を振り返り、その長い歩みのなかで生じた問題と解決策、記録管理のメタデータ標準化への経緯、そして最後にアーカイブズ記述の国際標準の新たな動きであるRecords in Context（以下、「RiC」という）開発の現状と展望について詳しくお話をいただいた。以下でその内容について紹介したい。

### 2 講演内容

#### 2.1 アーカイブズ記述をめぐる国際的な経緯

講演の冒頭では、まず記録を記述する理由について説明された。その理由は主に、大量に蓄積されがちな記録のなかから、利用者が求める特定の記録を探し出すため、そして、記録の意味を導き出すコンテキスト情報を文書化して残すためとされ、人類は、記録を使用してきた数千年の間に、多種多様な記述を実践してきたと紹介された。

こうした歴史において、各国政府や個々の企業はそれぞれの枠を超えてまで記述方法を標準化する必要はなかったという。ところが、オランダ東インド会社や英国植民地局など世界規模の機構においては、組織固有の記録保持や記述のしくみを世界的に普及させるこ

とを目指すようになった。そして18世紀後半から、ヨーロッパで独立した歴史アーカイブズが現れはじめると、そうした環境で働くアーキビストたちは、記録が存在してから何十年も経過したのちに記録をいわば「事後的に」リストアップして記述するという課題に取り組むことになったようである。しかしここでも、アーカイブズ機関はそれぞれ独自の記述のやりかたを考案し、実践していた。

1898年には、オランダの3人のアーキビストによって「ダッチ・マニュアル」が出版された。これは、アーカイブズの編成と記述にまつわる一連のルールの体系化に関するヨーロッパ初の試みだったという。そして、ダッチ・マニュアルでは、出所原則や原秩序の原則など100のルールが提示されており、出版から120年以上経過した現在でも、アーカイブズの実践に大きな影響を与えていることが指摘された。このダッチ・マニュアルの影響が欧米諸国に広がり、大学などでアーカイブズ教育プログラムが開設されるようになると、アーカイブズ記述のやりかたにある程度の共通性が生まれてきたようである。とはいえ、各アーカイブズ機関は依然として独自かつ地域独特のやりかたを実践し、記述にはまだ多くのバリエーションが存在していた。その理由については、アーキビストたちは自分なりのローカルなアーカイブズ記述に愛着をもっており、そのやりかたを変える理由はないと考えていたからであると説明された。

一方で、図書館ではこの時期、目録記述実務の世界的な標準化において大きな進展を遂げていた。(定義上は固有のものではない) 出版された資料を扱う図書館に対して、アーカイブズの所蔵資料は、その定義からしてそれぞれ固有のものであり、その記述もまた固有のものとなる。ダッチ・マニュアルの100のルールを厳格に遵守したとしても、アーカイブズ資料には特異性があるため、記述を標準化する必要性は非常に低かったようだ。

しかしながら、こうした状況は1980年代にオンライン・コンピュータ・ネットワークの出現により大きく変化した。この変化のきっかけはやはり図書館からだったという。オンラインで目録の共有を可能にし、複数の図書館のコレクションを横断検索できるようにする、すなわち利用者の助けになる書誌ユーティリティが開発されたのだ。アーキビストたちは、アーカイブズ資料の記述情報も機械(コンピュータ)によって読み込める形式で作成できれば、所蔵資料の管理や、利用者の資料検索を現状よりはるかに容易に行うことができることに気がつき、そのことを契機として、アーカイブズ記述に対する意識と姿勢に変化が現れたようだ。そこで、機械が読むことができる記述情報を処理・管理・共有するために、記述自体の標準化が必要とされるようになったという。突如として、アーカイブズ記述を標準化する理由が生まれた。

こうした状況を背景に、アメリカ、イギリス、カナダにおいてアーカイブズの国内記述標準が策定され、それぞれ改訂・更新がなされていった。これらの動きは国際的にも影響を及ぼした。ICAは、1990年に記述標準に関する特別委員会(後に記述標準委員会と改名)を設立し、1994年には『国際標準アーカイブズ記述(一般)』(General International Standard Archival Description、以下、「ISAD(G)」という)を策定した。ISAD(G)は20カ国語以上に翻訳され、国際的な記述の実践に多大な影響を与えた。記述標準委員会

はISAD (G) のほかにも、1996年に『国際標準アーカイブズ典拠記録 (団体、個人および家族)』(International Standard Archival Authority Record for Corporate Bodies, Persons and Families、以下、「ISAAR (CPF)」という)を、2007年にはさらに『機能記述のための国際標準』(International Standard for Describing Functions、以下、「ISDF」という)を策定した。

カニンガム先生は、ISAAR (CPF) とISDFの策定について「記録作成のコンテキストを文書化することの重要性を、アーキビストの間で認識するようになった。つまり、記録を記述するということはそれ以上のことがあり、重要なポイントである」と強調されていた。

## 2.2 「出所」についての問題とその解決策——オーストラリアの「シリーズ・システム」の出現

次に、国際標準化を果たしたアーカイブズ記述にどのような問題が生じたか、特に「出所」に関する複雑な状況について話がすすんだ。

前述した記述の国際標準のほとんどは「ある出所 (の实体) とアーカイブズ資料群は一对一の関係にある」と想定されている。これはダッチ・マニュアルで示されていた見解であり、その影響からアーキビストたちは「ひとつのアーカイブズの出所はひとつしかない」と頑なに信じることになったという。だが、実際のところ、政府や企業においてはたびたび組織改編が発生し、「出所と資料群が一对一の関係にある」ことは稀であり、現実を反映できていなかった。この問題に対して、オーストラリアのアーキビストが導入した解決策が「シリーズ・システム」だった。

シリーズ・システム誕生の背景には、オーストラリアの頻繁な行政改革がある。イアン・マクリーンなど初期のオーストラリアのアーキビストたちは、北米の「レコード・グループ方式」を本国政府の記録へと適用することを試みたようだ。レコード・グループ方式とは、政府機関や家族など個別の記録集合レベル (レコード・グループ) に対して、その存在が消滅するまで、記録を追加するアプローチである。しかし、オーストラリアの官僚機構は行政単位・政府機関・担当省庁の間で絶えず機能が再配置されており、この再配置に伴い記録も一緒に移管されてしまうのが一般的であったため、官僚機構の安定性に頼るレコード・グループ方式を知的コントロールに適用する際には、出所が複数存在することがネックになってしまったという。

1964年、オーストラリアのアーカイブズのアーキビストであるピーター・スコットが、知的コントロールの議論の中心からレコード・グループ方式を捨て去り、記録を生み出す機能ベースの「シリーズ」による管理を提案した。記録のシリーズに焦点を当てたスコットの管理モデルは「シリーズ・システム」と呼ばれるようになった。シリーズ・システムは、「Record」(記録そのもの)、「Agency」(組織や人など記録の作成者)、「Function」(記録を生み出す機能や活動) という3要素から成立しており、記録作成とその作成に関わるコンテキスト要素を分離させつつも、3つの構成要素を相互に関連付けて記述するという

アプローチをとっている。スコットは、シリーズ・システムがレコード・グループ方式よりも柔軟性があり、変化に耐えうる効率的な方法だと考えたとされる。

そして最近では、アーカイブズ記述の標準 (ISAD (G)、ISAAR (CPF)、ISDF) にもシリーズ・システムのアプローチが取り入れられるようになったという。これらの標準は、記録作成と記録管理に関連する主要関連要素 (Record、Agency、Function) を分離させつつも関連付けて記述するというシリーズ・システム概念モデルを、明示的ではないが支持するものであったようだ。

### 2.3 記録管理のメタデータ標準「ISO23081」(Metadata for managing records)

次に、記録管理のメタデータ標準である「ISO23081」の紹介がなされた。メタデータの一般的な定義は「データについてのデータ」であるが、もう少し具体的にいえば「記録作成者が記録を説明するために取得した記述情報」となり、コンテキストを示すものとして不可欠な情報である。メタデータの種類や用途はさまざまあるが、記録管理のメタデータはその中でもやや複雑な分類になるという。記録の内容、コンテキスト、構造を記述するすべての情報は記録管理のメタデータといえるが、記録管理がこうしたメタデータにより構造化できれば、記録の保全やアクセスなどに有効な管理が可能となる。記録管理のメタデータにはアーカイブズ記述と検索手段も含まれるため、メタデータ標準はアーカイブズ記述標準ともいえるようだ。

記録管理のメタデータ開発は、1990年代後半にモナシュ大学（オーストラリア）の共同研究プロジェクトによって始められたという。この研究プロジェクトは目的のひとつに「記録管理のメタデータに関する国際標準の開発に影響を及ぼすこと」をあげており、その開発もまたシリーズ・システム概念モデルに根ざしたものだ。そして、この研究プロジェクトの成果は、実際に記録管理メタデータの国際標準であるISO 23081の開発に影響を及ぼし、それは大きな功績であったと紹介された。

ISO23081で取得すべき要素として定義されているのは「記録のメタデータ」、「業務ルールやポリシー、命令についてのメタデータ」、「行為者のメタデータ」、「業務活動とプロセスのメタデータ」、「レコードキーピング・プロセスのメタデータ」の5つである。ISO23081のモデルでは、記録管理のメタデータはこれら5つの構成要素の相互関係性を捉えて表現すべきとされており、カニングム先生は「ここにもシリーズ・システム概念の影響をみてとることができる」と指摘された。

### 2.4 アーカイブズ記述の新たな世界——Records in Contexts (RiC)の開発

記録管理メタデータの紹介に続き、いよいよアーカイブズ記述の新たな国際標準であるRiCの説明に移っていった。

ICAは、ISAD (G)、ISAAR (CPF)、ISDFの策定に取り組んできたが、これらの標準が長年にわたりばらばらに整備され、正式に概念化されたモデルのなかで共存できていな

いことを認識していたようである。実際のところ、アーカイブズに携わる実務者たちは、国際的にISAD (G) の実施に力を注いでおり、こうした状況を背景に、ICAは2012年、これまでの記述標準委員会にかえて、アーカイブズ記述のための統一された概念モデル策定を目的としてアーカイブズ記述の専門部会 (Archival Description Experts Group、以下、「EGAD」という) を設置したという。

ISAD (G) はそのシンプルさにおいて利点があったが、記録の複雑なコンテキストの関連性を表現しきれないという短所があった。そこでEGADは当初から、ISO23081で示された、記録を記述するための概念モデルに着目していたそうである。EGADは、記録管理のメタデータ標準と、アーカイブズ記述の標準はいずれも「記録とコンテキストを記述するもの」であることを認識し、ISO23081で示された複数構成要素のメタデータモデルに近い、アーカイブズを記述する複数構成要素のアプローチを採用して、2016年に「RiC」と題する概念モデルについてパブリックコメントを求めるための草案を公表した。この時に寄せられたパブリックコメントをもとに議論を重ねたうえで、2021年には大幅に改訂された第二次草案の公表に至った。そしてRiCの最終完成版は、2023年初頭に公表される予定ということだ。

RiCは、ISAD (G) の「マルチレベル記述」から脱却して「多次元の記述」へと移行しているという。これは単一階層から、構成要素の関係性を表現するのに適したグラフデータベースへの移行ともいえ、RiCの大きな特徴になるという。すなわち、記録そのものと記録を生み出した要素を、相互に関連する集合として理解し、その構造を文書化して記録の発見と利用を可能にするフレームワークなのだという。

また、ISO23081とRiCの構成要素モデルを比較し、RiCにおいて新しく追加された構成要素はあるものの、どちらも「メタデータのフレームワーク」という点で両者は似通っていると指摘された。唯一の違いは、RiCはアーカイブズで利用され、ISO23081は記録管理で利用されるという点にあるようだ。

RiC紹介の締めくくりとして、カニンガム先生から、以下9つの「記録を記述するための統一要素」の提案がなされた。

- 記録 (集合物、表示実体を含む)
- 行為者 (団体、個人、家、職位) ……WHO
- 目的/目標/成果……WHY
- 活動/機能/アウトプット……WHAT
- プロセス……HOW
- 命令……典拠
- ルール……制約事項
- 場所 (管轄域を含む) ……WHERE
- 年月日……WHEN

カニンガム先生は、上記提案の前提として「記録は、業務を実現させることができるものであり証拠にもなるもの」、「記録を理解し管理するためには、業務のコンテキストを文書化しなければならない」ことを挙げられた。そして、どのようなコンテキストを文書化することが重要かを把握するためには「WHY（業務はなぜ行われるのか）」、「WHAT（どういった業務が行われているのか）」、「HOW（業務はどのように行われるのか）」、「WHO（誰がその実務を行うのか）」、「WHERE（どこで業務をするのか）」、「WHEN（いつ業務をするのか）」という6つの質問が必要であると説かれた。

## 2.5 RiC導入のメリット

最後に、RiC導入後についての話があった。RiCはまだ初期段階で、アプリケーション・ガイドラインの公表も数年先となるようである。しかし、この種の標準でまず行われるのはソフトウェア開発であるため、今後数年のうちに現場で使用可能なRiC対応アーカイブズ管理ソフトウェアが登場することに期待が寄せられているという。そして、カニンガム先生は、私たちアーキビスト自身も「RiC（及びISO23081）の実装に伴う費用及びその仕組みを理解する複雑さなど必要とされる労力の投入から得られるメリットがあるのだと納得する必要がある」とし、続けて、RiC及びISO23081を採用するメリットの最たるものは、アーキビストが責任を負うべき記録のコンテキストと真正性について、より適切に文書化し、保存できる点であることを改めて強調された。そして、RiC導入によって記録の構成要素の複雑な相互関係と必須事項が記述に正確に反映されれば、記録の理解に役立つ記述情報を提供できるようになり、利用者は現在よりはるかに良いサービスを受けることができるとして、講演を終えられた。

## 3 おわりに

ここまで、エイドリアン・カニンガム先生による講演内容の概略を紹介してきた。本講演では、アーカイブズ記述の国際標準が策定されるまでの経緯を丁寧にたどりながら、記録を記述する新たな国際標準についての解説がなされた。「ダッチ・マニュアル」が出版された当時は国家として存在していなかったオーストラリアが、伝統的な欧米型管理モデルにとらわれず、柔軟な発想でユニークなモデルを開発していった経緯は非常に興味深い。「出所と記録作成者及び記録とは、一対一の関係には還元できない。それならばアーカイブズの知的コントロールに対して動的なアプローチをとろう」というオーストラリアの発想は、日本のアーカイブズ管理を考えるうえでも大きなヒントになる。

また、ピーター・スコットの仕事を記録管理のメタデータ標準の世界で発展させ、さらに複数の国際的な記述モデルを協調的な方向へ収れんさせていくことに尽力されてきた、カニンガム先生をはじめとする多くの関係者の熱意に敬意を表したい。

しかし、新しい記述標準の導入に期待が高まると同時に、慣れ親しんだISAD (G) から移行することにいささかの不安を感じる部分もある。また、ISAD (G) の記述に限界

を感じつつ、同時にRiCの複雑なモデルの理解に敷居の高さも感じている（本稿でも、筆者の理解が及ばずRiCのパートが舌足らずなものになっていることをお詫びしたい）。そこで想起したのは、講演内で紹介されたコンピュータ・ネットワークの発達以前のアーキビストたちのエピソードである。当時、ダッチ・マニュアルは存在していたものの、アーキビストたちはそれぞれのオリジナルの記述方法に愛着をもち、それを変える理由はないと考えていた。しかし、彼らもアーカイブズ記述の国際標準の導入によって適切な所蔵資料の管理や、利用者の資料検索が改善できることに気がつき、それを受け入れていった歴史がある。それと同様に、RiCの導入が記録への理解をより深め、利用者サービスの向上とアカウントビリティの支柱としての記録保全に寄与するのであれば、私たちはこれから少しずつRiCを学んでいけばよいのではないか。カニンガム先生も、講演後の質疑応答において「現在の記述標準からRiCに今すぐ置き換わるということはない。アーキビストを驚かせないように、ISAD (G) のやり方を踏襲しつつ、新しい記述のアプローチへと導いていく」と仰っていたのだから。

最後に、ICAにおいて国際標準の策定に携わったご経験をふまえて、記録管理のメタデータ標準とアーカイブズ記述の双方のお話をしてくださったエイドリアン・カニンガム先生、そして、新型コロナウイルス感染症の蔓延により2019年度から相次ぐ延期を経ながら、地道な準備を重ね、本講演を実現してくださった学習院大学アーカイブズ学専攻に感謝を申し上げます。